九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

瀬戸内の神と石炭 ： 金刀比羅宮

宮崎, 太郎
元炭礦労働運動家

https://doi.org/10.15017/13591

出版情報：エネルギー史研究 ： 石炭を中心として. 4, pp.78-80, 1974-12-10. エネルギー史研究会
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

瀬戸内の神と石炭
——金刀比羅宮——

宮崎太郎

瀬戸内海は名のごとく本州・九州・四国を結ぶ内海である。古代より大陸交易の重要な交通路で、其の要所々々に宮嶋に厳島神社、大三島に大山祇神社、琴平には金刀比羅神社があって海を守り、海難を防ぐため鎮座することも当然である。

近代産業の発達は資材・製品の輸送を益々盛んにし、特に石炭の輸送は福岡・佐賀・長崎・熊本・山口の産炭地より瀬戸内沿岸・京阪神・中部・京浜に送る時、瀬戸内海は是非通過しなければならない航路であった。ちなみに昭和二十三年（日本石炭協会）発行の『石炭統計総観』によれば、次表の如くである。

九　州　（機帆船）

営業炭	特殊炭	省用炭	発送先
24, 883	ナ　シ		東　京
85, 654	22, 084		東　海
2, 220, 760	129, 748		大　阪
589, 675	43, 362		四　国
559, 652	71, 324		中　国
317, 666	43, 899		宇　部
		847, 463	

九　州　（汽　船）

営業炭	特殊炭	省用炭	発送先
606, 018	19, 467		東　京
337, 670	21, 467		東　海
500, 624	24, 613		大　阪
109, 795	5, 574		四　国
16, 750			中　国
2, 207	ナ　シ		宇　部
		1, 914, 724	

山　口　（機帆船）

営業炭	特殊炭	省用炭	発送先
1, 896	ナ　シ		東　京
40, 234	397		東　海
642, 560	205		大　阪
158, 072	ナ　シ		四　国
220, 618	ナ　シ		中　国
373, 111	480		宇　部
		5, 061	

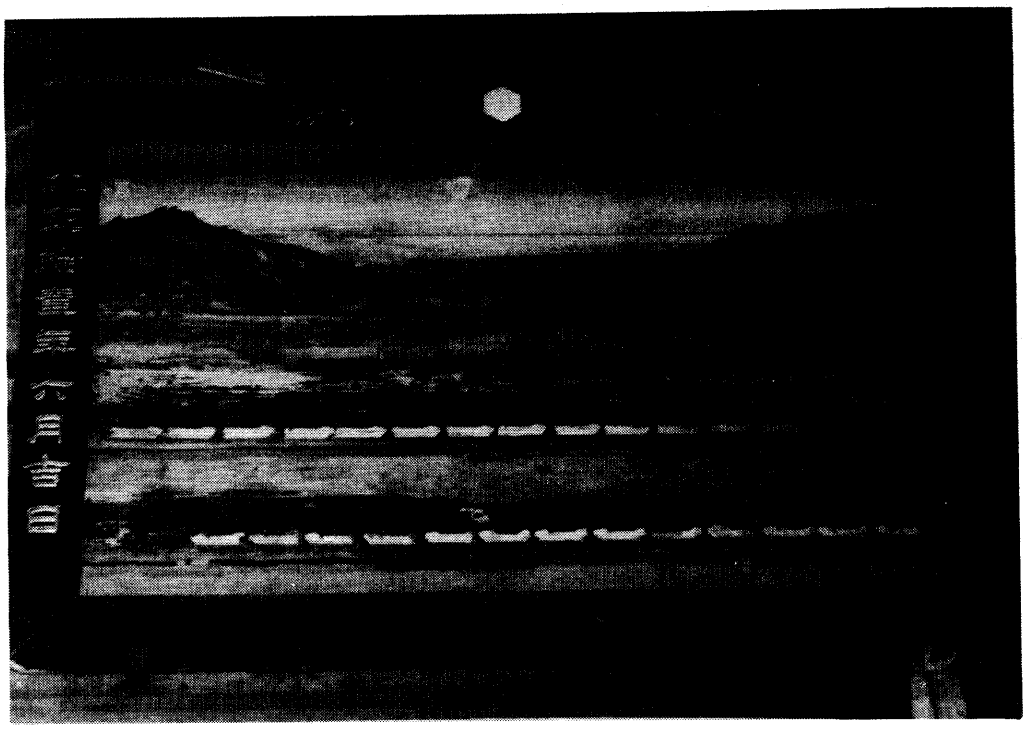
山　口　（汽　船）

営業炭	特殊炭	省用炭	発送先
128, 178	298		東　京
68, 969	ナ　シ		東　海
5, 880	400		大　阪
ナ　シ	ナ　シ		四　国
ナ　シ	ナ　シ		中　国
ナ　シ	ナ　シ		宇　部
		ナ　シ	

以上の如き厖大な数量の石炭が輸送されたのである。これ等輸送に従事する人々がいかに航海の安全を願ったかは四国琴平の金刀比羅宮に二組石炭輸送船の絵馬を奉納して居るのでも分る。一組は大正十二年六月、一組は昭和二年十一月となって居る。

金刀比羅宮は大日本帝国地理精義（小林房太郎著、大正十四年十一月発行）によれば「琴平町、象頭山麓に位し、金刀比羅宮あるをもって栄ゆ。宮は象頭山の中腹に在り。階段的市街を経て達すべし。国幣中社にして大物主神を祀り、崇徳天皇を配祀す。世に金刀比羅権現と称し海上航行の守護神として海人の尊崇甚だ著し云々」とある。

富島組奉納絵馬



富嶋組奉納絵馬（大正十一年六月）

㈠ 奉納されている絵馬の額縁は丸半形の材木で、枠組み画面の地肌は板で、其れに絵を書いて居る。地方の宮々に奉納されて居る絵馬と同じ。縦一メートル余、横一メートル五〇余。

㈡ 絵馬縁正面上に「奉納」を間をおいて書き、その間に紋所と思われる六角形白色の紋章あり。中身の図柄は不明。縁の右側に富島組艀船部、左側に大正拾壱年六月吉日とあり、文字は堀刻金文字。

㈢ 絵柄は水平線前方に二山、その中間遠方はるかに二山あり。山形は瀬戸内独特の突起形。海水の色は水色でなく、薄い黒色らしく見える。

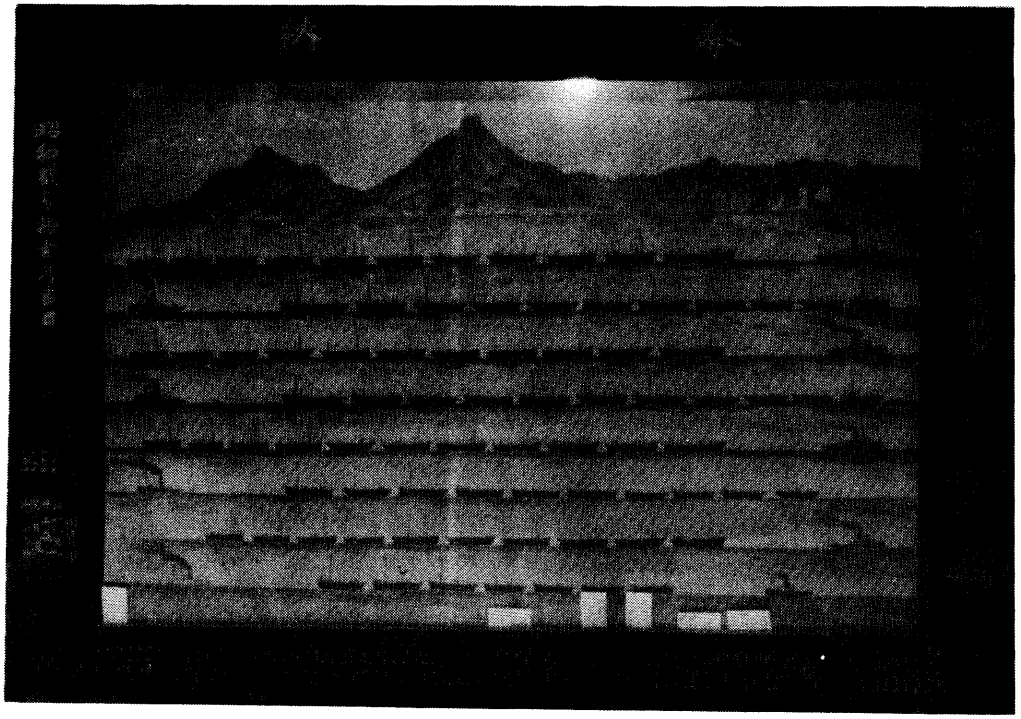
㈣ 水上の艀舟（ハシケ）は十三隻一列縦隊の二列になっており、引舟（機関船）は書かれず、隊列の航海方向は一列は往、一列は復と思われる。舟の色は白色で良く浮出ている。画面の絵具の色ははげ木肌が出て、全体として薄い黒色で不明箇所多し。

株式会社中村組曳船部奉納（昭和弐年拾壱月吉日）

㈠ 絵馬の額縁は分厚い板で、わずか奥行に傾斜し枠を組立ている。画面地肌は板で、黒色の絵具をぬり、白色で文字を書く。

㈡ 絵馬縁正面上部に「奉納」と書かれ、右側縁に□□……（社章）株式会社中村組曳船部、下三段の文字は二十四名の人名、縁正面低部の細字は九十名余りの人名で共に奉納者の姓名である。額縁の左昭和弐年拾壱月吉日の下に世話人豊田郡木の江町出張所主任高橋辰次郎、中野町畠中八重松、東の町望月渡、原の町平小次郎五名の姓名あり。奉納者全人員は百二十余人。

㈢ 画面は中央より左に瀬戸内独特の突起形二山あり、低く荒々し



株式会社中村組曳船部奉納（昭和弐年拾壱月吉日）

しい。山は右枠縁まででせまっている。海上に浮ぶ舟は横八列で十一、十、七隻曳の隊列である。上段より第一列は機帆船十一隻、帆柱は右に立ち右先頭を機関船が曳く。第二列は機帆船十一隻、帆柱は左に立ち左先頭機関船が曳く。第三列機帆船十一隻、右に帆柱立ち、右先頭を機関船が曳く。第四列は機帆船十一隻、左に帆柱立ち、左先頭を機関船が曳く。第五列機帆船十一隻、右に帆柱立ち、右先頭を機関船曳く。第六列機帆船十隻、左に帆柱立ち、左先頭を機関船曳く。第七列機帆船十隻、右に帆柱立ち、右先頭を機関船曳く。第八列機帆船七隻、帆柱左に立ち、左先頭を機関船曳く。

註(1) 機帆船一隻に舟頭一家族乗組む（船内生活）。

(2) 当時若松港より大阪迄往復六日乃至七日間であった。

(3) 機帆船の載積量は五〇トンから一五〇トンで、港に着き自力で小廻りするためエンジンをつけていた。